



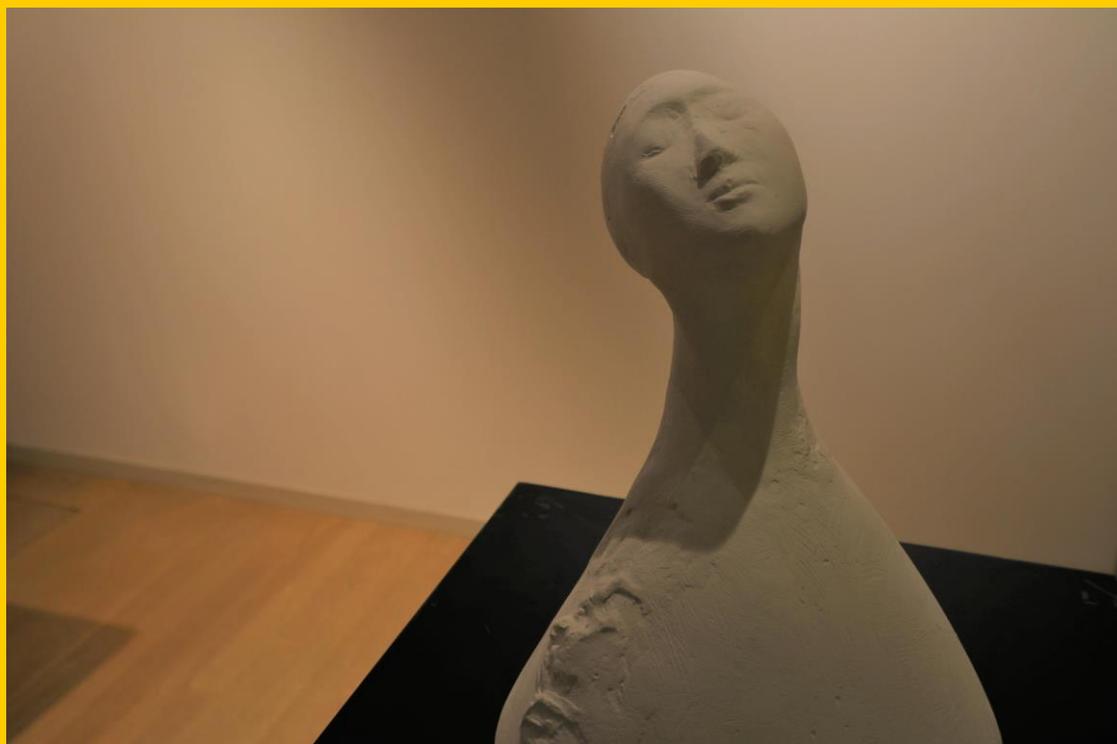
いづみ

No.65

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 35



(撮影 小林さおり)

《こころで聴くとき》

鴻上 宏子

(2 ページに「作者の言葉」)

小さな音を聴く時、瞼を閉じて耳をすます。その響きが迷い、葛藤、後悔、いつしか占めていく負の感情。静かに許し、慰め、もやが晴れていくような存在を求めて制作しました。

(道教育大卒。在学中から道展、二科展などに出品。現在無所属。彫刻美術館、芸森美術館などに出品多数。)

タイトル：《こころで聴くとき》

制作年：2018年

素材：石膏

サイズ：H30×W19×D38cm

設置場所：作者所蔵

バーンスタインに学ぶ芸術家の思い

業務係 山下秀幸

今年2018年は、世界的なアメリカ人指揮者・作曲家であるレナード・バーンスタインの生誕100年にあたり、世界各地で記念公演が行われています。毎年夏に札幌コンサートホール Kitaraを中心に開催されるパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）の創設者でもあり、今年のPMFは例年以上に盛り上がりました。

そのバーンスタインの立像が中島公園内にあります。ブロンズ製で台座を含む高さは3尺50寸。タクトを持ち、Kitaraを望むようにすっと立つ姿は端正ですが、表情はどこか物憂げにも感じられます。

バーンスタインは教育や平和活動に熱心で、音楽の力を広く社会に発信してきた生き方も改めて注目されています。音楽を担当したミュージカル『ウエスト・サイド・ストーリー』も、スラム街の不良少年たちの悲劇という社会問題を扱った作品でした。1985年には広島を訪れ、被爆40周年を悼むための「広島平和コンサート」を開催しました。

本郷新の作品《嵐の中の母子像》は広島の惨害をモチーフにしています。広島市の婦人団体の募金活動によってブロンズ鑄造され、原爆惨禍のモニュメントとして1960年に広島平和記念公園に設置されました。

広島に思いを寄せ、人間や平和を愛した二人の芸術家の生き方を改めて考えさせられました。

来年2019年は、本郷新の大切な友人だった同じ札幌出身の彫刻家・本田明二が生誕100年を迎えます。当館で11月2日から開催する「本田明二展」でも、北の地に根を下ろして創作に打ち込んだ作家の生き方や、作品に込められた思いを感じていただきたいと思います。



彫刻家と素材の関係

彫刻家・渡辺行夫（会員）

彫刻を志して大学に入り、その当時の一般的な材料として粘土、石膏、プラスチック、石、金属、木と学んできました。その中でも石こそ自分がこれから追求すべき素材であると感じました。その過程には迷いがなく、何か自分の人生ですでに織り込み済みですよという感覚だったと思います。

その後、ひたすら石と向き合い彫り続けてきました。重くて硬く、時間と金がかかり、防塵対策と体力が必要です。それらの困難要因のすべてが不思議なことに魅力と感じたのです。好きになるとはこういうことなのですね。そんな感じで30年以上彫り続けました。時々ではありますが、「石ばかり彫っている人だな」と、自分を客観的に斜め横から眺めているような感想を他人事のようにつぶやいたり、この先も石を彫り続ける自分を疑うことなく想像していました。そんな私も時には他の素材に手を出すこともありましたが、結局は頭の中の発想根源には石がどんと座っていました。まだまだ自分には表現しきれないものがあると感じ、次々と石の作品を作り、アイデアを求めてデッサンを繰り返していました。

ところがあることをきっかけに、気が付くと少しずつ身近にある材料で表現する作品作りが混入するようになってきました。それはハルカヤマ藝術要塞を始めた頃から特に多くなってきました。電気も水もない山の中で作品を創るという条件。しか

も材料をその場で調達する制作スタイルを自らに課して作ることを面白く感じ始めたことがきっかけでした。木や単管、土や石ころ、そして植物を使うようになってきました。ここ5、6年は特にイタドリを使う作品が多くなりました。いろんな使い方を実験的にやっています。まだ、自分で納得行ける段階には達しているとは言えません。造っては壊し、デッサンをしては消したり、描き加えたりを繰り返しています。

今アトリエの中はあれだけの石の粉と石材用電動工具やエアークラスターで埋まっていたのに、今は隅に片づけて、ホコリもあまりなくどこを触っても粉で汚れることもありません。肺にはとても良い環境になりました。制作過程の清潔さや容易さは全てにおいて大きく違います。

あれだけ「石しかないよ」と思っていた自分が石を彫る大変さを今感じています。でも、石が嫌いになったわけではありません。気に入った発想が出てくればそれに合う素材に手を出します。これから何を使って表現活動を続けるかは発想次第ということになりそうです。

素材を変えて作るということは表現の到達点が全く違ってきます。その都度、頭の切り替えが必要になります。そのことに新鮮さを感じながら取り組んでおります。結局、石の呪縛からは解放されてきていることだけは確かですが、石を彫り始める環境は常にそばにあります。

芸術の森野外美術館解説ボランティア

発足 24 年 励みは来館者の感謝のひとつ

代表世話役 田中文夫

ボランティアの正式名称は「札幌芸術の森野外美術館解説ボランティア」です。札幌芸術の森は、1994年（平成6年）3月、事業の一層の充実と利用者へのサービス向上を目的に、野外美術館作品解説ボランティアを募集しました。養成研修修了者35名で6月から活動をスタートしています。その後、会員の減少があり数年毎に追加募集をしながら現在に至り、平成30年はボランティアが誕生して24年目を迎え、1期生から10期生まで31名で活動しています。

解説は、定時解説と随時解説、事前に予約が入る団体解説があります。定時解説は、毎日午後1時から3時30分まで希望者に対して行います。土、日、祝日、および指定があった日は午前も10時から12時30分まで行います。通常当番は1人ですが、土、日、祝日の午後は2人です。定時解説は解説開始の前に場内アナウンスがあり希望者を募ります。定時解説の希望が無い時は、当番の時間内で券売の担当者が入場者に声をかけて、希望があれば文字通り随時行っています。

団体解説は団体によって目的が違い、時間も要望に合わせてまちまちです。昨年までは市内の小学校の5年生を対象にしたハローミュージアムも担当しましたが、今年からそれは無くなりました。その他、4月29日のスプリングフェスタ、7月の最終日曜日のハッピーバースデー、11月3日のサンキューデーでは、様々なイベントのお手伝いを行います。ブロンズ磨きも年数回行っています。

活動期間は野外美術館の開館に合わせて4月29日から11月3日までです。野外美術館は1月上旬から3月上旬までは無料開放されますが、その期間はボランティアによる解説はありません。当番は、昨年までは概ね週1回、年間を通して20～25回くらいでした。

養成研修は、私が受講した2011年は4月から9月までに17回行われ、終了後委嘱を受けて10月にデビューしました。研修方法は毎回少しずつ変化してきているようです。より良い解説を行うために、冬季間も継続して毎月研修会を行っていて、学芸員からの講話とボランティアによる自主研修の発表などを行っています。また、毎年夏と秋に行われる園外研修では、道内の美術館、芸術家のアトリエなど美術関連の施設を訪問して新しい知識の習得に努めています。

解説ボランティアをやって心から良かったと思うのは、お客様がお帰りになる時に「解説をやってもらってよく分かった、ありがとうございます」と感謝の言葉を頂いた時です。その他、解説ボランティアは展覧会のオープンセレモニーに招待されて図録を頂き、芸術の森と札幌彫刻美術館で行われる展覧会を同伴者1名と何度も見る事ができます。また、通算10年に達すると感謝状、永年フリーパス、記念品を頂くという特典もあります。報酬はありませんが、交通費は実費が支給されています。まずは区切りの10年は続けるつもりで、今年もゴールデンウィークからスタートしました。

札幌彫刻美術館図書コーナー支援活動着々進む



本郷新記念札幌彫刻美術館に眠る本郷新の蔵書などを来館者に利用してもらおうと美術館から要請を受けて昨年から続けられている蔵書整理が順調に進んでいる。作業に携わっている会員の高橋淑子さん、島岡孝子さんに感想を寄せてもらった。

来館者との触れ合いが新鮮

高橋 淑子

昨年11月から毎週1回3時間、彫刻美術館記念館の図書コーナーの支援活動を行ってきました。内容は①蔵書の整理②スクラップ記事のデータベース作り③来館者の見守りの3つです。

3000冊余の蔵書を整理していると、台帳との照合では特定できない本も多く、また、スクラップ記事は昭和20年代の新聞記事など貴重なものも。

地味な仕事で疲れた時は来館者とのふれあいが新鮮。三岸好太郎と一緒に上京した俣野第四郎のお兄さん（俣野第一郎氏）のひ孫という方が本郷新との縁を求めて来館し、「初めて知りました」と感慨深げだったり貴重な出会いの数々です。

新しい発見に心わくわく

島岡 孝子

彫刻美術館2階で今年1月から月2,3回のペースで本郷新の蔵書整理に携わっています。

3000冊ほどの本1冊ごとに書名、作者名、発行年、出版社などできるだけ詳しい情報を調べます。

地味な作業ですが、中には、本郷新に宛てた手紙や礼状、メモなどが本の中から出てきます。彫刻作品集の中から私の好きな彫刻にも巡り会いました。心ワクワクしながら、あっという間の3時間です。ふだん彫刻本に触れることもなく、世の中にこんなに多くの彫刻家がいることを知ったのも驚きです。これからも1冊1冊丁寧に探して宛てて行こうと思っています。

恒例友の会バスツアー

初夏の余市 “ワインとフレンチ豪華ランチ、を堪能
ニトリ美術館、渡辺行夫アトリエ訪問も

初夏の後志方面を芸術鑑賞で巡る友の会のバスツアーが6月6日、総勢43人が参加して行われ、余市のフゴッペ洞窟、ニッカウキスキー工場、「オチガビ」ワイナリー、さらに、小樽では芸術の村鑑賞、彫刻家アトリエ訪問など盛りだくさんの内容だった。参加者の中からお二人に感想を寄せてもらった。

古今の人々の心をのぞく旅

喜多村貴美江さん

「ワイン飲み放題」の文句に釣られて参加。フゴッペ洞窟では縄文人の壁画を目の前で見るとワクワク。ワイナリーは鹿児島から移住してきたオーナーが日本一のワインを作っていて、余市を盛り立てる！という熱意に感動。昼食のワインは美味だった。



小樽芸術村で開催中の浮世絵展では会員の高橋淑子さんの解説付きで、江戸の風情まで感じる事ができた。

最後は彫刻家の渡辺行夫先生のアトリエ訪問。ちょうど恐竜のティラノサウルスを制作している所で、本体は発泡スチロール、色付けはイタドリの粉末と聞いてびっくり。

バスツアーでは、「見える物」と「見えない古今の人々の心の内」をのぞき見る事ができたようだ。

静謐な古代のロマンに感動

桜田信明さん

5月に開催されたテラコッタ彫刻の講演会をきっかけに入会、フレンチランチとワインの魅力にひかれてツアーを楽しんで来た。

フゴッペ洞窟では静謐な空間に刻まれた有翼の人物像に古代の祭儀のロマンを感じた。

渡辺行夫氏の工房訪問も強く印象に残った。庭の草むらに隠れた、無造作に



置かれた石のオブジェは遺跡発見の様な、無邪気な喜びを覚えた。制作中の恐竜の大きさと、かつては畑の厄介者でしかなかったイタドリの粉末で全身を覆うという、芸術家の発想力の豊かさに驚いた。

似鳥美術館では、川合玉堂や、伊東深水の日本画や、アルカイックな雰囲気棟方志功を楽しむことが出来た。

「V-net News」が友の会特集

高橋大作副会長と奥井登代事務局長対談

アートボランティア団体の支援組織「さっぽろアートボランティア・ネットワーク」の機関紙「V-net News」が彫刻美術館友の会の特集を組み、活動状況を対談記事などを交えて大々的に紹介した。



今年6月30日発行の「V-net News」第4号で、特集「アートボランティアの仲間を紹介する！」の第一弾。A4判4ページの大半を使い、表紙では友の会の設立経緯、活動主旨、さらに会の運営組織と活動内容を写真も交えて紹介した。

さらに2、3ページの見開きで友の会の高橋大作副会長と奥井登代事務局長にネット誌の中森秀一編集人が加わっての対談を掲載している。対談では彫刻清掃の必要性、野外彫刻のアーカイブ化、社会貢献としての広がりなど会の活動ぶりを話し合った。また、橋本信夫会長も「街なかの美を守ろうをモットーに草の根ボランティア活動を市民と展開したい」とのコメント寄せた。

同誌はV-net 加盟ボランティア団体などに配布され友の会の活動をPRする。

お掃り！《木下成太郎像》

修復終了して中島公園にお目見え

昨年11月以来、台座から外され修復作業中だった中島公園の《木下成太郎像》が8月末、すっかり化粧直しを終えて同公園の古巣に戻った。



像と台座を固定するボルトの腐食などの修復を行い、この日、損傷調査などを手掛けた黒川弘毅武蔵野美大教授ら関係者が見守る中、クレーンでつり下げられ、無事、元の台座に据え付けた。

新渡戸稲造夫妻碑清掃

新渡戸稲造記念公園（中央区南4東4）にある「新渡戸稲造萬里子両先生顕彰碑」の清掃作業は6月16日に行われ、清掃日和の中、水洗い、ふき取り、乾燥、ワックスかけ、つや出しと、一気に仕上げた。長身の会員



が像の頭の上まで手を伸ばし、高さのあるブロンズ彫刻の清掃を終了した。

「かもくま祭」雨中で健闘

パズルコーナーが人気

第12回かもくま祭が6月30日、7月1日の両日開催され、友の会もパズルコーナーなどで参加した。



本祭の7月1日は残念ながら朝から雨になり、初めて児童館室内で行われた。パズルコーナーは100人ほどの子供たちでにぎわい、風船で花や動物などを作ってプレゼント。狭いコーナーでも譲り合いながら子供たちと一緒に楽しんだ。

開成校生徒が友の会体験

彫刻清掃と塗装も

札幌市開成中等教育学校の安部愛優さん(3年)と斎藤太一さん(4年)の二人が8月9日、10日の両日、「リサーチ型企業研修」で友の会を訪れた。同校は2011年、旧開成高校を母体に生まれた札幌初の中高一貫教育校。二人は会の概要を学び、実地で中島公園の《鶴の舞》の清掃とパーマシールド塗布を体験した。



橋本会長から彫刻の説明を聞く安部さん、斎藤さん

事務局日誌

▼6月16日＝新渡戸稲造夫妻顕彰碑清掃(中央区南4東4)▼23日＝大通公園《いずみの像》ほか清掃▼28日＝会報「いずみ」64号発送▼7月1日＝「かもくま祭」参加▼12日＝第4回定例役員会8エルプラザ)▼24日＝彫刻学習会(エルプラザ)▼25日＝北農中央会訪問(彫刻清掃協力など)▼8月9日＝第5回定例役員会(エルプラザ)開成校生徒インターンシップ受け入れ/彫刻学習会(ケア掲載彫刻打ち合わせ)▼22日＝宮の森地区彫刻清掃《太陽の母子像》ほか▼28日＝《木下成太郎像》修復完了台座据え付け

編集後記

▼彫刻の写真を撮る機会がある。その都度、見栄えのするアングルを狙うが、時には彫刻の背後からによっきり電柱など邪魔物が写ってあわてることも。設置者は周りの景観まで配慮はするのだろうかと考え▼編集作業大詰め段階で北海道胆振東部地震が発生し、停電のアクシデント。PCが使えず焦った。皆様の周りで被害はなかっただろうか。お見舞い申し上げます。(大内)

札幌彫刻美術館友の会

会報「いずみ」 No.65

2018年10月1日発行

発行人 橋本 信夫

編集者 大内 和

(札幌市清田区清田5-4-6-30

011-884-6025)

印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」65号 目次

自作自選35 《こころで聴くとき》	鴻上宏子	表紙
作者の言葉	2
宮の森の四季35 「バンースタインに学ぶ芸術家の思い」	山下秀幸	2
風見鶏 「彫刻家と素材の関係」	渡辺行夫	3
寄稿 「芸森美術館解説ボランティア」	田中文夫 4
レポート 「彫刻美術館図書コーナー支援活動」	高橋淑子・島岡孝子	5
友の会ニュース	6-7
友の会バスツアー/V-net News 友の会特集 / 《木下成太郎像》復元 / 新渡戸稲造夫妻碑清掃 / かもくま祭健闘 / 開成校生徒友の会体験		
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか	8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

■市民交流プラザ開館記念連携事業

オペラの衣装と舞台美術 きらめ 煌く「アイダ」の世界

7月27日(金)～10月25日(木)

総合芸術と言われるオペラの美術の衣装や小道具などを展示。

■本田明二展

ひとノミひとノミ、私は木を削る。

11月2日(金)から2019年1月17日(木)

2019年に生誕100年を迎える彫刻家・本田明二。北の風土に育まれた野性味と素朴なやさしさにあふれる作品を紹介する。

記念館

■コレクション展

本郷新、その生涯と作品

(通年) 2019年3月31日(日)まで

本郷新が手掛けた野外彫刻の石膏原型やブロンズ、木彫など代表作、制作道具などを展示。

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<http://sapporo-chokoku.jp>